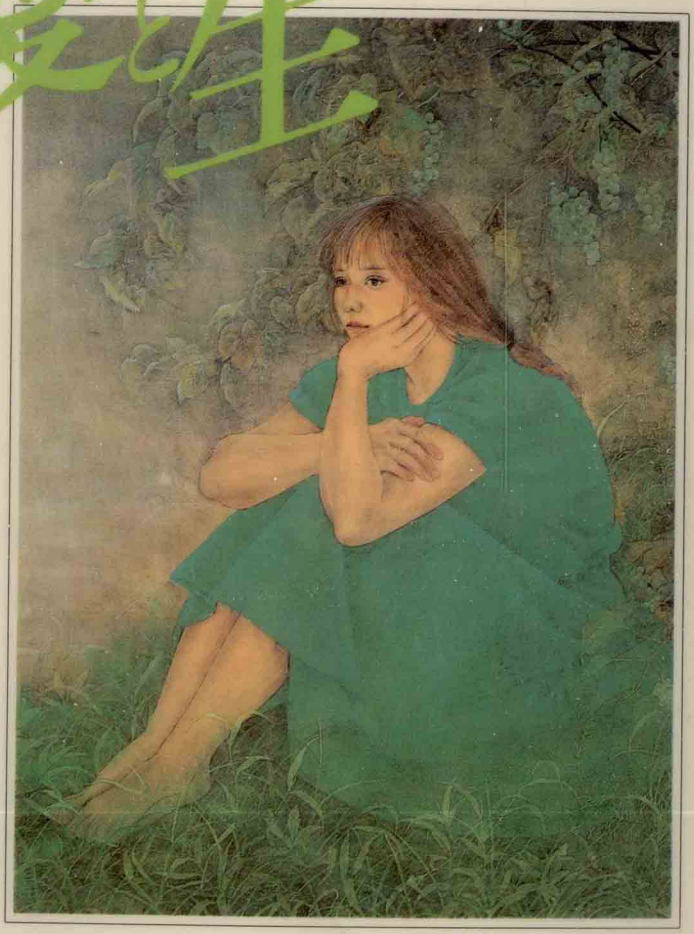
愛と生のエチュード



日比 工

愛と生のエチュード

日比 工

愛と生のエチュード

昭和六十年十一月十三日　初版第一刷発行

定　価　一、二〇〇円
著　者　日比　工
発行者　古川忠司
発行所　株式会社佼成出版社
〒一六六　東京都杉並区和田二―七―一
電話（〇三）三八三―三一五一（代）　振替東京七―七六一
印刷所　錦明印刷株式会社
製本所　小高製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします
©Takumi Hibi 1985. Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作権および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。
ISBN 4-333-01201-5　C0095

思索の真摯さと言葉の鋭さで語る自画像

京都市立芸術大学学長　梅原　猛

今、この日比工君の著書『愛と生のエチュード』を読んで、いささかとまどいの気持ちを禁じることはできない。実をいえば、この著書の半分を生原稿で読んで、佼成出版社にこの出版を勧めたのは私であるが、それが完成し、約一年の推敲の後のこの完稿を読んで、私はびっくりした。これはまさに経済的繁栄と引き替えに、魂の緊張感と心性の高貴さを失った日本の文化的状況に大きな衝撃を与える清澄なる雷である。そして、この作品はその思索の真摯さと言葉の鋭さにおいて、同時代のいかなる文学作品に比して遜色がない。この作者、日比工君なる者はいかなる人間なのか。

日比工君が私の前に現われたのは、昭和五十六年の春のことである。事務職員の案内で、お母さんに押された車椅子で学長室に現われた日比君は、私の著書『地獄の思想』を読んで、大変感動したので、ぜひ講義を聴きたいという。もちろんその言葉は、日比君が語ったわけではない。日比君の自ら語る言語は風のようであり、聞き慣れた人には多少意味がわかるかもしれないが、普通の人にはまったく聞きとれない。この日比君の言葉もお母さんが代弁したわけであるが、「私の著書をそんなに愛読してくれてありがとう。ぜひ講義を聴いてほしい」という私の答えに、日比君は顔をバラバラにして、うれしそうに笑った。それから数年、日比君は一日も休まず私の講義を聴いてくれた。私が学長

の業務が多忙で、十分に講義の仕度ができない時など、どの学生に対してよりも、日比君に対して恥じた。

日比君が私の講義を聴きに来る少し前、一家は学校の近くの洛西ニュータウンに越した。あるいは、その引っ越しは日比君をして私の講義を受けさせるためであったかもしれない。日比君がこのような著書を書けたのは、最大の教育者であるお母さんの力によるところ大であろう。生後半年で、重度な脳性マヒにかかったわが子の教育を、このお母さんは決してあきらめなかった。そして十七歳の時に、買い与えられた電動カナタイプによって、日比君が詩をつくるようになる以前にも、おそらく想像を絶する忍耐を伴うお母さんの粘り強い教育があったであろうが、日比君もそのお母さんの努力に十二分に答えた。しかし、十七歳の時から日比君には別の世界が生まれた。つまり、言葉による思想の表現ということが可能になったが、それが今一つのすばらしい果実を結ぼうとしている。

この著書は、恋に目覚め、恋に悩む青年の自画像である。そして恋情の純粋さと烈しさとにおいて、ゲーテのウェルテルに匹敵するものであるが、この主人公には、ウェルテルのもっている肉体が欠如しているのである。肉体の欠如を、この主人公は言葉で埋めようとしている。それゆえ、この主人公にとって、言葉はまさに己の存在そのものなのである。おそらく、この主人公ほど言葉が人間存在にとって、決定的な意味をもつ人間を私は知らない。そして、肉体を所有する普通の人間の間で起こるであろう、多くは陳腐で平凡な形式でしかすぎないさまざまな愛の交わりの現実を、この主人公は高度な哲学や、文学や、音楽を伴奏音とした不思議なモノローグによって代行させたわけである。

この『愛と生のエチュード』という題名は、三十年前に多くの青年に愛読され自殺した文学青年、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

原口統三の『二十歳のエチュード』を模したものであろうが、この作品には、『二十歳のエチュード』のような恵まれた環境に育った人間の運命に対する甘えはなく、恋人という鏡を通してみられた実に深く、かつ実に豊かな自己そのものへの内省があるのである。それはまさに、日比工君が創出した今までの日本文学になかった、一つの芸術の形式なのである。ゲーテやニーチェや、モーツァルトやベートーベンや、マーラーやシューベルトを論じつつ、音楽家ばかりか、文学者がもつ最も内的な音楽を巧妙に響かせながら、日比君はみごとな自画像を描いているのである。そしてその自画像は、決して単にたぐい稀な不運を背負った青年の、苦悩にみちた自画像というものではなく、人間そのものもつ愛と死という永遠のテーマを、その一見不幸な状況ゆえに、誰よりも真剣にそれを考えた青年の自画像と考えるべきであろう。

私は、驚くべくこの本が、日本人だけではなく、多くの世界の人に読まれることを願いたい。

誇り高く不器用な若い人たちへ

脚本家　山田　太一

日比君と手紙のやりとりをはじめて、何年になるだろう。カナタイプで打たれた文面とお母さんがお書きになった宛て書き。

長いこと私にはその組合わせが日比君だった。逢ったことはなかった。

はじめ日比君が本を送ってくれた。

『青春へ、ぼくの旅立ち』という日比君のはじめての本で、少年の日々を書き綴った詩文集だったが、その種の本にありがちな感傷や通俗的なヒューマニズムがなく、硬質で誇り高い印象を受けた。

私がそのような感想を書き、それから文通がはじまった。こっちが日比君のファンになったのである。日比君は私の作品など見ていないようであった。そして、それをちっとも気にしていないところも、なかなかよかった。負け惜しみではなく、世間一般の処世的配慮に従って時候の挨拶と変らぬ次元で世辞めいたことをいわれるより余程気持がよかった。

手紙の内容は気に入った本や感動した音楽についての感想で、それはニーチェだったり小林秀雄であったりモーツァルトでありマーラーであったりして、そうした世界に没入している青年にとって、テレビドラマが埒外にあるのは当然と思えた。そして、そういう日比君の生活に、私は自分の学生時

代を重ね合わせていたのである。日比君の手紙を読むと、他の誰からの手紙より自分の青年期の気分がよみがえった。

学生時代の私は、狷介で傲慢で誇り高くて、その裏側に世に入れられぬのではないかという不安や劣等感や俗物への憎悪をもて余すほどかかえこんで、本ばかり読んでいた。この頃は、そういう青年にちっとも出逢わないなあ、と思っていた。大体、そういう青年は私などに近づこうとしないだろうから出逢わないのは当たり前ともいえるが、日比君で私は渇きをいやすような思いがあった（そんな日比君が、何故私に本を送ってくれたかというと、大阪の中之島公会堂でひらかれた身障者の集りで、私を見かけたからということであった、と思う。私は、一種のボランティアとして参加していたのである）。

青年がそんなに軽くなめらかに生きられるはずがないという偏見が私の中にあり、日比君の手紙はまさしくその偏見と符合する青年らしさに溢れていたのである。

そして、この本の原型である「ソシテ詩ウモノ」が少しずつ送られて来はじめた。

その主調音は憧れとそれの満たされることの不可能であり、なにを素材にし、なにを論じ、なにを描写していても、その底流に、その旋律が聞こえるというものであった。

数十枚ずつ、ある時は百枚を超えて送られてくる原稿を、多くは夜更けに、私は読んだ。感想を書いた。

そこには青年らしい独断、不器用さ、潔癖、芸術への讃歎、性欲、無力感、強い侮蔑力などが濃密にあり、しばしば私は圧倒された。

たとえば彼がシューベルトを論じていても、それはシューベルトの実体に迫ろうという情熱ではなく、恋の想いを語っているのであった。その満たされぬ想いを、あからさまに吐露するにはナイーブで、しかしそれを語らずにはいられないという懊悩がどのページからも放射して、時には悲鳴を聞くような思いがあった。

もう一年以上も前になるだろうか。

日比君が東京へ遊びに来るという手紙をくれた。車椅子と山本明弘君という青年の助けを得て、数日を東京ですごすというのである。その間に逢おうということになった。私は、読書家で音楽好きで饒舌なくらいの青年と、これまでの手紙について、まだ書き終えていなかった「ソシテ詩ウモノ」について、沢山のことをしゃべり合おうと楽しみにした。

渋谷の、ホテルの一階の喫茶店に日比君はやって来た。山本君に介添えされて。

日比君は、目で私に挨拶をすると、一枚の布をとり出してテーブルの上にひらいた。それには「あいうえを」と〇と一から九まで数字が書かれていた。それから日比君は、縮めてしまうことの出来るラジオ用のアンテナを出して、それをのばした。そして、その先端で「こ」という字を指した。

しかし、それも容易に出来たわけではなく、脳性麻痺による不随意な動きにさまたげられて何秒かを要した。次は「ん」だった。「に」「ち」「は」

「こんにちは」と私はいった。

「と」「う」「と」「う」「あ」「え」「て」「う」「れ」「し」「い」と日比君が指した。

「ぼくも嬉しい」と私はいった。

だから一緒にいた時間のわりには、私たちは、多くを話せなかったけれど、思い出深い時間を過ごした。

そして、自分の青年時代との符合などとほざいて、日比君の書くものを読んでいた自分をはずかしく思った。

日比君の人生をとりかこむ条件は、若年時の私のそれとは比較にならぬほどきびしく、その体験の深刻さもそれを通して育まれた魂の深さも、遠く差があることを胸に沁みて感じた。

この本が、明るくなめらかに生きようとして生きられない、誇り高く不器用な若い人々に多く読まれれば、と心から願っている。

装画・松生　歩
口絵画・丸谷吉隆
楽譜版下・笹本二郎
装丁・望月　忠

〈編集部註〉本稿は、一九八一年から一九八四年にかけて「ソシテ詩ウモノ」という原題で書き下されたもので、一九八五年に改めて著者が加筆補修したものです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

愛と生のエチュード■目次

思索の真摯さと言葉の鋭さで語る自画像　梅原　猛　1
誇り高く不器用な若い人たちへ　山田　太一　4

プロローグ　13

〔第Ⅰ章〕言葉に寄す　15
第一節　エチュード　16
第二節　僕は人間であろうとする前に　23
第三節　土の中のコトバについて　28
第四節　思想を追うコトバ　36
第五節　君は僕という大樹を知っているね　52
第六節　見えないもの、聞こえないもの　70
第七節　美を支えるもの　80
第八節　病的、それは真理　91

〔第Ⅱ章〕流離人と　99
第九節　若者と流離人　100

第十節　祈りのような苦しみ　114
第十一節　帰る場所　124
第十二節　貝殻より　133
第十三節　肉声で詩うこと　143
第十四節　深刻な可笑しさ　153
第十五節　愛というアダージョ　163
第十六節　新たな宿　180
第十七節　永遠に女性なるもの　195

〔第Ⅲ章〕ソシテ詩ウモノ　207

第十八節　鏡と青春と　208
第十九節　哀しみという友達　228
第二十節　新たな「冬の旅」　243
第二十一節　ソシテ詩ウモノ　258

エピローグ　283

この書を我が過去（祖父）と
我が未来（弟）に捧ぐ――――――

プロローグ

すべてが許された今、僕はこの書物を君に贈ろう。最も静かな孤独の空洞から、死ぬことを最後に許された人間の交響曲だと思ってくれたまえ。

電動車椅子で、この街の中ならどこへでも行けるということは、死ぬことも出来るということだ。君を愛したが故に、僕は自殺を決意しないとも限らないから、これを書いておこうと思うのだ。もしも、そうなった場合を考えて、僕は君にここで、自分の精神の生い立ちを遺しておきたい。君がこれまで僕とつき合って、知り得た僕の生い立ちを否定しないまでも、もっと深い真実を知らせておこう。それが君を愛するまでの、僕の愛についての認識だったことを君は知るべきなのだ。

何故なら、君は僕の精神に入り、それを初めて見出した価値ある女性であるからだ。それだけで、君は充分に僕の真実を知る権利を持っている。僕の生い立ちそのものよりも、僕が理論的に、明快にし得た真実だけを告白する。何はともあれ、それが僕の真実への早道だ。そうして、君を愛するようになった過程を振り返ってみる。したがって、僕は僕のすべてを君にさらけ出すことになろう。

そう、これは僕の遺書である。明らかに自殺を企てるでもなく、華やかな君という恋人に、遺書を書くなどは滑稽かもしれない。しかし君よ、僕は何かを君に与えた上で世を去りたいのだ。確率から言っても、四歳歳下で健康な君故に、僕の方が早く死ぬのだからね。とりあえず、僕のこの厖大な恋

文を君に渡しておく。君の涙のひと雫が僕の額の真ん中に落ちるとき、僕の書き遺したものは命を宿すことになるだろう。これまで人間を信じたくなかった僕に、君はこう言ってのけた。

「人を信じたら最後まで信じたいんです」

僕はそれから自分以外の人間を信じてみたくなった。自分以外の人間を信じる。それは馬鹿げているが、確かに面白くもあった。君はそんな面白いことを僕に教えてくれた人だった。僕は、君を相手にそれを楽しもうと思った。僕が二十三歳で、君は十九歳。それなら、君は恋人としてもってこいだと思った。

スタンダールであれ、ショパンであれ、ハイネであれ、恋愛をしていたからこそ、あのような生のエチュードが書けたのだから。君という人を対象にして、僕は恋愛を経験したかったのだ。恋愛をそれらしくするためには、相手を信じなければならない。君をただ密かに想っているだけで、恋愛が成り立つと考えていた。しかし、恋愛はそんなに甘い観念ではなかった。恋愛を恋愛たらしめる一つ目の条件は、その相手の瞳が美しく見えることにあった。そして、その瞳の動きが絶えず気になり出したら、二つ目の段階を上りきっているのである。

日比　工

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook